

---

# 季節外れのサンタクロース

さやえんどう塩味

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

季節外れのサンタクロース

### 【Nコード】

N5319Z

### 【作者名】

さやえんどう塩味

### 【あらすじ】

あらすじ。 夏の女子柔道大会。3年の先輩たちの応援に来ていた菊池 麗。 同級生の話を立ち聞きし、部活をやめる一大決心をする。 退部届けを顧問の先生に提出した後、これからどうするか悩んでいた麗。 麗は自分の寺の墓場で、不思議な少女に出会う。 笑いあり涙ありの学園青春ストーリー！。 プロローグ001〜0

02

pixiv

<http://www.pixiv.net/novel/show>

W · p p p i d = 6 7 4 4 3 6

## プロローグ 「きっかけ」

プロローグ001

記述

夏……。

記述

響く歓声、怒号。

記述

そして熱気。

記述

激しく闘志をぶつけ合って、勝敗を決していく。

記述

女子柔道、地方選手権大会会場。

記述

毎日の成果を残すべく、歯を食いしばって立ち向かっていく。

記述

負ければ、そこで夏が終わる。

記述

これは先輩たちにとっては最後の夏だ。

女子柔道部員

「部長……次勝てそうかな？」

記述

凍らせたペットボトルを片手で取りながら、隣の部員に尋ねる。

隣の部員

「どうだろ、相手結構強そうだけど……。まあ勝ってほしいよね」

女子柔道部員

「まあね……。あんだけ必死にやってたんだし」

記述

「……………」

記述

2年生女子柔道部員達、試合前に応援席から立ち話をしている。

記述

私たちは部活の先輩たちの最後の大会の応援にきている。

記述

3年の先輩たちはこの大会で最後　この大会が終わればあとは受験等で忙しくなるため、事実上引退試合である。

記述

だから顧問の先生が3年の先輩たちに気を使い、後輩を集めて応援させているのだ。

記述

次戦は部長。人一倍柔道に重きを置いていた人だ。

女子柔道部員

「先輩たち、残り数試合で終わっちゃうね」

隣の部員

「全国行ける実力なんてないもんね、あたしら……。この試合勝っても、次辺りで終わっちゃうんだろうなあ」

隣の部員

「しっかしまあ……。あんだけ大真面目に練習してたのにさ、部長。現実ってこんなもんだよね。全国なんて無理無理」

女子柔道部員

「あつけないもんだよね……。たぶんあたしらの時もおんなじじゃない？ 来年あたしらだよ」

隣の部員

「そりゃー……。あー、まあそうだろうよ」

女子柔道部員

「はあ……。あたしらもたぶん全国いけないっていうのはなんかもうどっかでわかってるし……。本当にいいのかなあ」

隣の部員

「何が？」

女子柔道部員

「あたしの青春。このまま柔道に費やして本当に後悔しないかな、と思ってた」

隣の部員

「いうね。先輩が今の言葉聞いたら、あんたシバかれるよ」

女子柔道部員

「なはは……用心用心」

隣の部員

「おっ、試合始まった」

記述

部長が相手選手と礼を交わす。

記述

審判が両者の名前を確認し、試合開始を宣言しようとしている……。

女子柔道部員

「……………」

隣の部員

「……………」

隣の部員

「…………ま、わかんなくもないけどさ……あなたの言ってること」

女子柔道部員

「何が？」

隣の部員

「このままじゃ、後悔するかもしれないってこと」

女子柔道部員

「でしょ!?! やっぱ普通そう思ったりよね」

隣の部員

「ふーっ、でもさ、結局このままなんだけどねー」

隣の部員

「青春ってさ。なーんかあると思ってたけど、漫画みたいな特別なことなんて……何もなし」

女子柔道部員

「そうそう、勉強も難しくなって忙しいし、受験で塾もあるから前より全然時間ないし……」

隣の部員

「さらにこうやって部活やってりゃもう何もできないって。……あーあ、こうやって終わっていくんだろっなー、あたしも」

女子柔道部員

「なんかさ、人生で一番大事な時間なのに、めちゃくちゃ無駄にしてるかもしれないって思う」

隣の部員

「……作れば? 彼氏とか」

女子柔道部員

「いる。春からすでに」

隣の部員

「はっや。なら彼氏と仲良くやってりゃいいじゃん」



女子柔道部員

「それがさあ、なんかもうマンネリ。会ってももう話すことないし、彼氏作っても何すればいいかさっぱりわかんない」

隣の部員

「そっかー、まあ普通そんなもんだって。普通普通」

女子柔道部員

「普通かー。まあみんなもそんなもんだよね」

記述

「……………」

記述

普通そんなもの。

記述

その女子部員の言葉が私の心のどこかで引っかかる。

記述

考えないようにしていた。自分だけだと思っていた。

記述

けれど……………。

女子柔道部員

「ねえ菊池って彼氏とかさ……………ってあれ」

隣の部員

「どしたー？」

女子柔道部員

「いや、さっきまでそこに菊池いたよね……？」

隣の部員

「えっ？ さあ……あ、ほら。決着ついたみたい」

記述

……思えば、多分このときからだっただろう。

記述

唐突に、何かしなくちゃならないと思いはじめたのは……。

記述

。

記述

。

記述

……冬。

記述

冬といっても上着を着なくてもいいというぐらいには暖かい。

記述

寒さもそろそろ終わり頃。

記述

そんな感じの今日、私は、一大決心のために職員室のドアの前に来ていた。

記述

十分に息を整え、コンコンコン、と短くノックする。

記述

「鈴木先生〜！ 今いいスカ？」

記述

一瞬だけ先生たちが自分の方を向いた。大きな声は持ち前の元気さだ。

記述

職員室の奥側の机に座っていた鈴木先生が、席を立ってこちらに向かってくる。

鈴木先生

「どうした、菊池じゃないか。なんか用か？」

記述

「先生に見てもらいたいものがあるんすよ、これ」

鈴木先生

「ん〜？ なんだ、こりゃ。紙？」

記述

「ラブレターです」

鈴木先生

「…………ぶっ!？」

記述

「嘘ですよ。とりあえず読んでください」

鈴木先生

「なんなんだまったく…………えーと、なにになに…………っておい、これ退部届けじゃ…………」

記述

「先生、お世話になりました！ 先生のこと好きでしたよっ！」

鈴木先生

「ええ!？ おい、菊池…………今度春の大会もあるだろうが。なんで今更…………3年になって、これからお前らが主役なんだぞ!？」

鈴木先生

「練習だつてずっと頑張ってたから…………今度の部長、お前にしようと思つてたんだぞ!？」

記述

「…………じゃ、確かに渡しましたんで…………それじゃーそういうことで！ 今までありがとうございましてっ!！」

鈴木先生

「おいちよつとまで！ 菊池っ！ 菊…………ッ!！」

プロローグ002

記述

「ハア、ハア…………」

記述

「……………」

記述

部活を、辞めた。

記述

1年のときからずっと続けてきた部活を辞めた。

記述

意味も無く走って家に帰る。

記述

ダッダッダッ……………。

記述

ダッダッダッダッ……………。

記述

……………。

記述

古びれた街角の寺。

記述

階段をくぐり、参拝客用の通路の下を通り抜け……………関係者以外立ち入り禁止の張り紙がしてある扉を開ける。

記述

ガラガラガラッ……ボタン……。

記述

「……………」

記述

「…………た、ただいま……………」

記述

鞆を玄関前にポイッと放り、乱暴に靴を脱いで上がる。

記述

物が散らかったダイニング。テーブルの上に朝食の皿が残されていてだらしない。

記述

食器を流しに持っていくため、両手で運びながら。制服のブレザーをかけるハンガーを探す。

記述

「えーっと、あ、あつたあつた」

記述

ぱくつと木製の箸を口にくわえ、空いた左手でハンガーを取る。

記述

食器を流しに置いてブレザーを脱ぐ。セーターも脱ぐと静電気がバチバチいった。

記述

「あつ、ひょーやつは（そーだった）」

記述

箸を流しに置き、隣の部屋へ向かう。

記述

仏壇の扉を開、両足を折って座布団の上に正座する。

記述

チーン……………。

記述

ちよこんと置いてある鈴りんの縁を、隣にあった鈴棒で軽く叩く。

記述

部屋に響く甲高い鈴の音は、冷たい空気を更に清めるように、耳に心地よく響いた。

記述

仏壇に向かって手を合わせ、目を閉じる。

記述

「……………じいちゃん、ただいま。麗が今帰ったよ」

記述

仏壇に飾られている遺影、祖父の写真に手を合わせる。

記述

しばらく無言で手を合わせたあと、ゆっくり解いて足を崩した。

記述

「……じいちゃん、今日……。俺、じいちゃんに言わなきゃいけないことがあるんだわ」

記述

ひと呼吸おき、吐き出すように言葉を続けた。

記述

「……今日、顧問の鈴木先生に、退部届け出してきたっ！」

記述

言い切ったという表情で、ふいーと表情を崩す。そのあと……。となって表情を元に戻す。

記述

「やっぱ……。怒った？ やー、そりゃ怒るよなー。じいちゃん、ずっと柔道だけは続けるっていいよったもん」

記述

「俺もな、結構悩んだんだけど……。やっぱ自分に嘘つけないって思ってたさ」

記述

「あー！ あー！ で、でもなっ！？ 学校卒業したらちゃんと寺継ぐし、そしたら色々ちゃんとやるから」

記述

「だから、これだけは……。ごめんっ！ー！」

記述



ガバツ！

記述

必死に仏壇に向かって頭を下げる。

記述

……もう今年で終わっちゃうから、今年は何かしたいんだ！

記述

その一心でじいちゃんの仏壇に頭を下げる。

記述

「……………っ！！」

記述

「……………っ」

記述

「……………」

記述

何かって……………なんだ？

記述

ふと思つて頭を上げてみる。

記述

「何するとか、どうするとか、何もまだ決めてないうちに部活辞めちゃった……………」

記述

「って、そうだよっ！ 一番大事なのそこじゃんっ！？ 俺、部活辞めて何すればいいか全然わかんないし、何も決めてないよ！」

記述

「あああ、あ、ああああ……………」

記述

「バタッ……………」

記述

畳に仰向けに倒れる。

記述

目に入るのは木造のしなやかな天井。

記述

「……………」

記述

「……………あああ」

記述

「ああああ」

記述

「ああああー！」

記述

「わーっ！ わーっ！」

記述

「わああああ……」

記述

「……………」

記述

何じゃそりゃ……。

記述

腕を目の上へのせ、深くため息を吐いた。

記述

はあ……。

記述

やっべー、どうしょ……。勢いだけでとんでもないことしちゃったよ……。

記述

あーあ、俺ってば昔からこれだからなーっ！ 後先考えずに行動しちゃって、それからどうするかまったく考えてなかった！

記述

「……………」

記述

鳥がさえずる声が聞こえる。車が道路を走って、通り抜けていった。

記述

静かだ……。とつても……。

記述

「……………」

記述

「……………まあ」

記述

「いつかあ……………」

記述

そつだよな、もう退部届けだしちゃったんだ。何するかは後で考えよう。

記述

「んーっ！…！ よいしょーっ！…！」

記述

足を振り上げて勢い良く立ち上げる。

記述

そつだよ。もうどうしようもない。何をするかは境内を掃除しながら考えよう。晩飯も用意しなきゃだし。

記述

そつと決まれば話は早い。制服から巫女装束に着替え、掃除の準備を始める。冬に巫女装束ってやっぱり寒い。

記述

……パキ。

記述

……？

記述

窓が鳴った、ような気がした。

記述

きっと気のせいだろう……早々に着替えて草履を履き、墓の方へと  
行ってみる。

記述

ビュオオオオオ！

記述

「うおーっ、さっぶ！ やっぱまだ冬だあ……」

記述

さて、掃除だ掃除。準備準備……。

記述

「あれ……」

記述

掃除をはじめようと外に出て、ちょっと離れた前方に女の子が立っ  
ていることに気づいた。

記述

どこかの家の墓の前、自分と同じ歳……かそれより下ぐらいの女の子。なんだか虚ろな目で墓石をじいつと凝視している。

記述

なんだろう、見たことない子だけど……。

記述

手にとっていた竹箒を壁に立てかけ、女の子の様子を伺ってみる。

記述

……肌がすごく白いな。あんまり日に当たってないような、なんだか弱々しい印象だ。

記述

吹けば飛んで消えてしまうというか……どこか危うげで切ない……そんな印象。

記述

そういえば服もこの寒い日にパジャマみたいな寒そうな格好をしている。まるでベッドから起きてそのままの格好で外に出てきたような感じだ。

記述

ふっ……と少女が動いた。

記述

虚ろなままの目で、ズボンのポケットに手を突っ込み、なにやら黒い棒みたいなものを取り出す。

記述

そのまましゃがんで、その棒を墓に向けて……。

記述

あ、何してるのか分かった。

記述

「おっ！っ！ まてやコラアアア！」

記述

女の子の方へ全速力で走っていく。

女の子

「あ……」

記述

「なに墓にペンで落書きしてんだコラアアッ！」

女の子

「……魔王だ」

記述

女の子が自分の方をむいて立ち上がる。

記述

「……は？」

記述

今言い放った彼女の言葉が理解できずに、ぶっきらぼりに聞き返した。

女の子

「魔王」

記述

「何だよ魔王って……え、もしかして俺のこと？」

記述

コクコク。

記述

「……いやいや、俺は魔王と違う……っていつか女で魔王はないだろ……」

女の子

「魔王……」

記述

「魔王違う！　なんか失礼だなあ、こんな美少女捕まえて。いいかあ、俺は菊池……」

女の子

「麗」

記述

「……え？　……あ、そ……そうだよ！　俺は菊池麗っていう立派な名前があるんだ！」

女の子

「うん、菊池麗……姉ちゃん」



記述

「おうそつだ……ん、でもなんで俺の名前知って……ああ表札でも見たのか……」

女の子

「やっぱ、魔王じゃん？」

記述

「はあ……？ まあいいや、とりあえずそのペンをかせっ！」

記述

強引に女の子の手からマジックペンを奪い取った。

女の子

「ああん……乱暴」

記述

「気つ色悪い声をだすなっ！ 全く落書きなんて……って、ああっ  
！！ これ油性ペンじゃないかっ！！」

女の子

「それしか持ってなくて」

記述

「まったくこいつ……あー落とすの大変だよこれ、もあ〜」

記述

「おいこのやろつ。いいか、墓石っていうのは神霊の依り代で、マジックで落書きなんてしていいものじゃ……」

記述

マジックで落書きされたそれを見た。

記述

墓石の側面にはその家族の名前が彫られていて、名前が横に並んでいる。その最後のところに、マジックで小さく名前が書き足されていた。

記述

「……………これ、お前の名前か？」

女の子

「うん」

記述

「お前、この墓の家の子？」

女の子

「ううん、違う。苗字が一緒だったから」

記述

「……………」

記述

なんで、墓に自分の名前なんか……………。

女の子

「ねえ、お姉ちゃん」

女の子

「まだ  
」

女の子

「まだ、柔道やってる？」

記述

えっ？

季節外れのサンタクロース 第一章001 「食堂からの風景」(前書き)

あらずじ。 主人公、熊谷 渉は白秋西学園の2年生。生まれてこの方友達がいたことがなく、いつも一人ぼっちで学園生活を過ごしている。笑いあり涙ありの学園青春ストーリー。 第一章001

季節外れのサンタクロース 第一章001 「食堂からの風景」

第一章001

記述

人。

記述

人、人。

記述

人、人、人。

記述

大勢の人々が券売機から手に入れた食券を手に、我先にと配膳所へとなだれ込んでいる。

記述

あちらを見れば金髪のチャライ男子生徒、こちらを見れば真面目そうな小柄の女子生徒。

記述

腹をすかした生徒に年齢性別など関係ない。

記述

腹が減れば誰だって飯を食う。

記述

そう、それは大自然の偉大な摂理だ。

記述

お腹をぺこぺこにすかせた大量の生徒が、長く列をなして大蛇のよ

うにっこめいている。

記述

大蛇の中腹、そのあたりで自分の順番が来るのをぼーっとして待っている生徒たち。

記述

その様子をテーブルに座ってぼーっとしながら見ている。

記述

ひまつぶしの観察。

記述

自分と全く関係がない他人でも、ただ見るだけで案外楽しい。

記述

たとえばこの食堂。

男子生徒

「おいつ！俺の方が先だったろ！？ 順番守れよ！」

男子生徒

「おばちゃん！天ぷらうどん、大盛りね！」

女子生徒

「ええ〜！？もうAランチ売り切れなの〜！？」

記述

ここに並んでいる生徒は、友達同士で騒いでいるやつもいれば、ひとりで静かに本を読んで待ってるやつもいる。多種多様、十人十色だ。

記述

以下、何の変哲もない昼休みの食堂の一般風景の例。

記述

1 (毎日毎日、食堂に来て並んでは列の長さに文句をいい、メニューの売り切れに落胆すること。

記述

2 (食い飽きたメニューから昼飯を選べば、あとはいつものやつと一緒に固まって食うこと。

記述

3 (もう何回も同じことをしているはずなのに、食堂が生徒であふれない日はないこと。

記述

毎日同じことを繰り返しているこんな日常から、普通と違う所を見つけることは面白い。

記述

おもむろに制服のブレザーの袖を右手で横にずらして腕時計を確認。

記述

8分。

記述

4 限目が終わってから経過したその時間、8分だ。

記述

この時期の食堂は『午前の授業が終わって5分以内に食堂の配膳所

に並ばないといけない』という認識がある。

記述

それより遅いと自分の飯を受け取るまでに少なくとも30分は長蛇の列に並ぶ羽目になってしまう。

記述

時間が経てば食堂で昼食を取ろうとする生徒が殺到するからだ。

記述

……というのもあるが、それだけなら30分も並んだりはない。

記述

本当の理由は、今が4月だったこと、この食堂が白秋西高校の食堂だったこと、この二つだ。

記述

白秋西学園にある食堂……名称「白秋食堂」は、実は地元じゃかなり有名なのだ。

記述

普通なら近所のおばさんとかが、

記述

『あの高校は吹奏楽部がすごいねえ』

記述

とか

記述



『英語に力入れてるわよねえ』

記述

なんていうもんだ。

記述

はい、白秋西の場合。

記述

『白秋西は食堂がすごいわよねえ』

記述

とか

記述

『白秋西は食堂だけすごいわよねえ』

記述

とか

記述

『白秋西は食堂以外すごいくないわよねえ』

記述

なんていわれるんだ。もうその時点ですごいから驚きだ。

記述

白秋西学園ってのはそんだけおかしい所なんだって思っていていい。正解。

記述

だからこそ、この時期は新しく入学してきた1年生が物珍しさで白秋食堂に押し寄せてくるというわけだ。

記述

上級生なら経験があるから早くから並ぶが、1年生たちは何も知らないで列に並ぶのだ。

記述

長蛇の列に並んだ末に昼休みが終わって飯が食べられなくなる1年生の様子は白秋食堂の隠れた春の風物詩だ。

記述

去年のオレも列に並んでしまって、泣きながら教室に戻ったっけ……。

記述

知らないで並んでいる新入生は去年のオレと同じ洗礼を受けるのだろうか……。

記述

……。

記述

……。

記述

だからなんだ、そんなことを考えたところで意味などない。

記述

そもそもどこぞの設定の紹介みたいな独り言をしゃべっているのは、

全て俺がたいくつしているからだ。

記述

【たいくつ】：何もすることが無く、暇を持って余している状態。体育館シューズの別名。長座体前屈の略でもある。

記述

みてみるよ、オレのテーブルには誰もいない。

記述

この4人座りのテーブルに座っているのはひとり、オレだけだ。

記述

別に、あとから来るわけでもない。

記述

食堂で一人飯を食う様は正直言って周りの視線が痛い。

記述

『ママーあのひとだけひとりでご飯食べてるよ〜  
なんて幼女の声が聞こえてきそうだ。』

記述

そうさ。オレは友達がいなひとりぼっちの高校2年生だ。

記述

読者の皆さんはそろそろこつこついう風に言いたいんだろう。

読者の皆さんその1

「おいおい、いつになったらかわいい女の子の絵が出て来るんだよ」

読者の皆さんその2

「ずっと主人公がしゃべってて画面が微動だにしないよ」

記述

言いたいことは分かる。だがちょっと待って欲しい。

記述

オレだってそうさ。話は進めたいさ。かわいい女の子といっぱいいっぱいお話したい。

記述

話を進めようにも誰も絡んでこないんだ。内心次の展開どうしようって焦ってる。

記述

主人公っていうならさ、普通はいつも朝起こしてくれる幼馴染とか、いつも一緒にバカやってる悪友つてもんが必ずいるもんだ。

記述

まあ俺にはいないわけだが。

記述

そう考えると、オレは主人公には一番向いていないんだ。でも実際みんなもそんなもんじゃないか？

記述

幼馴染がいたとしてもさ、現実じゃ朝起こしてなんかこないだろ。

記述

現実には起きないことが起きるからゲームなんだってな。

記述

そうさ、中学校も。小学校も。幼稚園さえも。

記述

いつもひとりであそび、ひとりで飯を食べ、健やかに成長した。

記述

それがオレ、熊谷 渉という人間だ。

記述

……どれだけかわいそうな子供なんだろうな、オレ……。

記述

間がもたないのでまた食堂の風景を観察する。俺の普段の生活はこんな感じだ。

女子生徒

「みんなー、ここの机に座ろうよー」

女子生徒

「おなかもうペーペー」

女子生徒

「ちよつとあんた、もう少し横詰めてくれない？」

女子生徒

「全員そろった？」

女子生徒

「うい、そろったよ。あたし水取ってくるよ」

女子生徒

「みんなで取ってこようよ」

女子生徒

「はあ？ やだよめんどくせー、お前いけ」

女子生徒

「しょーがないなー」

記述

あーあ、オレと違ってひとりぼっちになってない連中って人生楽しいのかなあ……。

記述

女子生徒たち6人がテーブルを囲んで仲良く昼食をとってる。

記述

いいなあ……弁当の中身交換したりすんのかなあ……。

記述

別段よく見る光景だけど、男子生徒と違って女子生徒は群れることに何か別の約束事が決まっているみたいだ。

記述

あっちの奥テーブルの女子の集団なんか、8人全員同じカレーの並盛を頼んでいる。

記述

予めみんな同じにしようと思つてたんだろつな。

記述

男子と一緒に飯を食つことはあつても、メニューまで一緒にしようなんてないよなあ？

記述

8人もいるなら一人ぐらいうどんを食いたいやつがいてもいいはずだ。

記述

そついう意味じゃ、男子より女子の方が生きづらいのかも。

記述

逆に言えば女子が何かの間違いでひとりぼっちになつちまうと……ご愁傷さまです……。

記述

お……？

女子生徒

「あ、あれ？」

記述

奥テーブルの女子の集団の中に、うどんをのつけたトレーを抱えた1人の女子生徒が、小走りでその集団の方に向かつて行つていく。

記述

マジでいたよ……うどん。

うどんの女子生徒

「じ、ごめんなさい……お、遅くなりました……」

女子生徒

「瀬川く！ あんたト口過ぎく、みんなもつ食つとこだったよ」

女子生徒

「は？ なんでお前うどん頼んでんの？」

うどんの女子生徒

「え、だ、だって……朝、涼子さんが今日はうどんだって……」

女子生徒

「は？ 言っつてねえよ」

女子生徒

「涼子、んなこと言った？」

女子生徒

「あたしはうどんなんかあり得ねえって言ったただだよ」

うどんの女子生徒

「そんな……」

女子生徒

「こいつ、涼子のせいにするのかよ」

うどんの女子高生

「いえ……」



別の女子生徒

「は〜い水です」

女子生徒

「ばっか、水がトレーにこぼれてんじゃん!」

女子生徒

「9個も水乗せて歩けるかつつの、ああ、コップ足りなかったから1人湯呑みね」

女子生徒

「おう、サンキュー」

女子生徒

「湯呑みなんかやなこったー! お先にコップいただきっ」

女子生徒

「ばか、急に取るなって! こぼれるだろー」

記述

飲み物の奪い合い、水の入ったコップが次々に取られていく。

うどんの女子生徒

「えっと私も……」

うどんの女子生徒

「よいしょ……」

記述

うどんの女子生徒が手にとったのは、コップの方だった。

女子生徒

「……は？」

うどんの女子生徒

「あ……いえ……」

記述

手にとったコップを元に戻し湯呑みの水に取り替える。

女子生徒

「瀬川、わるいねー」

女子生徒

「ありがとー、瀬川」

うどんの女子生徒

「あ……はい」

女子生徒

「ま、瀬川になるよねー」

女子生徒

「正直分かってたわー。瀬川が湯呑みになるの」

うどんの女子生徒

「……」

記述

……。

記述

……。

記述

あいつ……グループの中でいじめられてるのか。

記述

よし……。

記述

オレは颯爽とその女子グループのところに向かっていった。

渉

「おい」

女子生徒

「あ……？ 何だお前？」

記述

オレはうどんの子をいじめていた女子生徒の横っ面をシバいた。

記述

バシッ！

女子生徒

「……ッ！？」

女子生徒

「……………」

涉

「自分の友達、いじめてんじゃねーよ」

女子生徒

「あ……………」

記述

「おい、いくぞ。うどん」

うどんの女子生徒

「え、あ……………はいっ！」

記述

……………。

記述

とができたらいいんだけどね。

女子生徒

「そのうどん結構つまそうじゃん。一口頂戴」

うどんの女子生徒

「あ、はい。いいですよ」

記述

見たところそんなひどいわけでもないし……………。自分でどうにかする  
だろ。

記述

.....。

記述

午後からの授業……いやだなあ。

季節外れのサンタクロース 第一章002 「オレの天使」(前書き)

あらずじ。 主人公なのにひとりぼっちの涉。 そんな涉がクラスメイトの女の子からクラス会に誘われた。 笑いあり涙ありの学園青春ストーリー。 第一章002

季節外れのサンタクロース 第一章002 「オレの天使」

第一章002

記述

桜が咲いたところに……入学式やクラス替えが終わった。今日からと  
うとう授業だ。

記述

今日からが本当に新学期というわけだ。

記述

まだ寒いながらも日差しは暖かみを帯びてきたし、外の桜も大体は  
咲き終わって、これから後は散るだけだ。

記述

なんだか感慨深いものがある。

記述

だが新しいクラスになった喜びもつかの間……。

記述

うちの学園では2年から3年は持ちあがりになっていて、クラス替  
えは今年が最後だ。

記述

知り合いとクラスが離れたやつは、一人にならないように無理に他  
人に話しかけたり集まったりしているが……オレはどうするべきか  
……。

記述

クラス替えを機に何か変わって欲しいな……この何も変わり映えのない、ぼーっと流れていく毎日が。

記述

……いつそ変えてみてやろうか。オレから。

記述

午前中は式だなんだでめでたいことに潰れた。

記述

晴れある一回目の授業はホームルームだ。無難っちゃ無難っっていうことで自己紹介を一人づつ言うことになった。

記述

ここでいっちょ面白いことをすれば、あっという間に人気ものだ。

先生

「……えーじゃあ次」

記述

……よしオレだ。

記述

オレは自分の筆箱から鉛筆を二本取り出し、両方の鼻の穴に入れた。

記述

奥まで入ったのを確認すると、ゆっくりと椅子を引いて席を立つ。



渉 「元2年B組、熊谷渉です」

渉 「帰宅部です。好きなものはアニメとゲーム」

渉 「友達は、いません」

渉 「みんな仲良くしてください」

記述 ……………。

記述 反応はなかった。

記述 吹き出す奴もツツコミを入れる奴もいなかった。

記述 誰もオレのことを見ていない。早く終わって欲しいと言わんばかりに視線を下にして俯いている。

記述 「コグスワース……」

記述 ダメ押しにつぶやいてみた。

記述  
……。

記述  
……。

記述  
……ダメだ、みんな無反応だ。美女と野獣見てないのかお前ら。

記述  
オレは全てをあきらめて力なく席に座った。

記述  
……。

記述  
……。

記述  
結構寝たなあ……。

記述  
授業が終わった途端に騒がしくなる教室。

記述  
エロゲーだったらここで可愛い幼なじみとか仲のいい男友達が話しかけてくるのが一般的といったところか。

記述

だが前述した通り、オレにはそんな奴ら一人もいないんだなこれが。

記述

休憩時間をどうやり過ごすか考えるのは本当に苦痛だ。

生徒

「ねえねえ、今日の集まり、どこら辺にしようか」

生徒

「駅前のボーリング場とかどうかな、カラオケだと嫌がる人もいるし」

生徒

「あつ、そつだねーそこらへんも考えて決めないと……」

記述

なんか楽しそつだなあ……いいなあ……。

記述

俺も行きたいよ飲み会。

女子生徒

「あつ、熊谷君」

記述

突然女子から声を掛けられた。断っておくが別に知り合いではない。

涉

「ん、何？」

記述

オレは刺さったままの鉛筆を鼻から抜いた。

女子生徒

「まだ熊谷君には知らせてなかったから、言っとこうと思って」

女子生徒

「えっとね、せっかく一緒になったわけだし、卒業までずっとこのクラス同じだから、みんなで親睦会やるうって話があるんだよ」

渉

「いいね。親睦会」

女子生徒

「ちょっと前から話は回ってたんだけど、熊谷君と連絡取れる人いなかったから伝えるの遅れちゃって、ごめんね」

渉

「いや、いいよいいよ。オレもそんなに友達いなかったから」

女子生徒

「そ、そうなんだ……。それでね、実はそのパーティーやるの、今日なんだよ」

女子生徒

「ホント急な話で申し訳ないんだけど、熊谷君、来れる…？」

渉

「マジで？」

女子生徒

「うん、マジで」

渉

「オレなんか行っていいの？」

女子生徒

「もちろんだよ。クラスメイトじゃん」

記述

すげえ、オレ……生まれて初めてクラス会誘われた……。

渉

「行く！ 行かせていただきます！」

女子生徒

「わかった。熊谷君参加だね。ちゃんと来てね！」

渉

「もちろん」

女子生徒

「それじゃあ私が幹事だから、何かあったら私に連絡してね。アドレシと番号教えるから！」

渉

「よろしく頼むよ」

記述

赤外線でアドレスを交換しようとする。

記述

誰かと携帯を向け合うことは正直ちょっと照れ臭い。

記述

だが交換し終わらないうちに、午後の最後の授業を始めるべく先生が教室に入ってくる。

先生

「おらー、6時間目始めるぞーちゃっちゃんと席に座れー」

女子生徒

「あゝ、先生きちやった……！ 熊谷君、アドレスはまた後で！」

渉

「おう！」

記述

幹事とかいう子はそのまま走り去ってしまった。

記述

オレがクラス会に誘われるなんて夢でも見てるんじゃないだろうか。

記述

ちよっとほっぺたを自分でつねってみる。

記述

……あれ、痛くないかも？

記述

いやいやそんなことない。うん、痛い。確かに痛い。

記述

夢じゃない。

記述

すごいな。オレにもとうとう春が舞い降りたか……。

記述

いやいや……人生には3回はモテる時期があるっていうしな！

記述

フフン、まだ3回とも残してるからな……。

記述

とりあえずさっきの女子、結構可愛かったなあ……。

記述

もしかしたらこのクラス会を機に仲良くなってつきあったりなんかしちゃったり……。

記述

よし、オレの天使は君に決めた……。

記述

きっとオレは、あの娘とそれはそれはロマンチックな高校生活を送るに違いない。

記述

まだ午後の6限目だ。

記述

これが終われば親睦会……。

記述

残りの授業、かったりいなあ……。

記述

よし、早く終わらせるためにこの時間も寝るぞ！

記述

羊が1匹……2匹……。

記述

……。

記述

……ぐ！。

記述

……。



季節外れのサンタクロース 第一章003 「願えば少女」(前書き)

あらずじ。主人公なのにひとりぼっちの涉。そんな涉がクラスメイトの女の子からクラス会に誘われ、ワクワクしながら授業を寝て過ごす。すると……。笑いあり涙ありの学園青春ストーリー。

第一章003

季節外れのサンタクロース 第一章003 「願えば少女」

第一章003

記述

燃えるように赤く色づいた陽の光が暖かく窓辺を照らす。

記述

廊下では腹に響くようなキューバの低音と、グラウンドで汗を流す生徒の声が反響する。

記述

教室に残っている生徒は誰もいない。

記述

寝ぼけまなこを擦りながらぼーっとしてみる。

記述

どうやら誰も起こしてくれなかったようだ。

記述

あ……親睦会、どこであるか分かんないや……。

記述

あの幹事の娘の連絡先聞けてないし、他の誰の連絡先もわからん……。

記述

これじゃ、どうしたって行けないじゃないか。

記述

……。

記述

……。

記述

もう、あきらめて帰ろう……。

記述

教室にいてもしょうがないし、オレにはさっさと学校から帰るしか  
選択肢がなかった。

記述

ため息混じりに下駄箱に向かう。

記述

一番左端の右から3番、下から5番目がオレの靴箱だ。

記述

適当にぶらついて時間でもつぶすか……。

記述

学校が終わった後の帰り道。

記述

何の気もなしに、のろのろとした足取りで商店街を歩く。

記述

明るく暖かな太陽の光が傾き、地平線の向こうが夕日で少し眩しい。

記述

この辺りにある店はだいたい行きつくしちゃったなあ。

記述

目につくのはコンビニやら雑貨などの店。わき道にファーストフードの飲食店やファッション服の店。

記述

服なんか全然興味ないって……。誰に見せるわけでもないのに……。

記述

道に落ちていた空き缶を蹴り飛ばす。

記述

……この状況を一変する何かがあればなあ。

記述

美少女が空から降ってくるとか。

記述

異世界に飛ばされるとか。

記述

なんでもいい、このつまらない毎日から解放されるならオレは喜んでそれを受け入れよう。

記述

そつだ、念じれば通ず。願えば幼女だ。

記述

目をつむるとそこには真正面から突っ走ってくる幼女がいて。

記述

必然のようにぶつかり転倒、目の前にはううくと泣くつるぺた幼女……。

記述

こつというのは気持ちが大つだ。本気で念じれば幼女の一人や二人ぶつかつてくるはずだ

涉

「……」

涉

「……こいつ」

涉

「幼女……こいつ!」

記述

幼女オオオオオオオツツ!!

記述

ドンッ。

記述

前方から唐突に何かがぶつかつてきた振動。

記述

おっ！？ これはマジできたか？

記述

目を開けたら、そこにはきつと……。

不良風の男

「いててて……」

不良風の男2

「だ、大丈夫ですかアニキ!？」

不良風の男2

「おいっ！ てめえっ！ どこに目えつけて歩いてやがる!」

記述

…… そんな都合のいい話はなかった。

記述

目を開けてみればつるぺたな幼女などおらず、よりにもよって金髪  
の怖そうな不良たちにいちやもんをつけられていた。

不良風の男

「いてて…… 右腕が折れた…… もうダメだ……」

不良風の男2

「そんなんっ！ アニキッ！ しっかりしてくだせえ」

不良風の男2

「おいてめえ、アニキになんてことしやがる!? ただで済むと思  
うなよ!？」

不良風の男

「これは病院代を払ってもらわんなあ」

涉

「ちょっと当たっただけで骨が折れるわけないだろう……?」

不良風の男

「俺は骨粗鬆症ですぐ骨が折れるんだよ! 牛乳飲んでねえからな  
あ〜!」

不良風の男2

「おい、黙って病院代払えばいいっていったんだよ! 素直にアニ  
キに従わねえと、てめえの骨も折れちまうよ?」

記述

なんて古典的なカツアゲだ……。

記述

この平成の世にもまだこんな古風な不良がいたんだなあ……。

記述

まったく今日は同級生に置いていかれるわ……不良に絡まれるわ……  
… 本当についてない。

記述

平和主義のオレはおとなしく金を払う事にしよう……なんかもう今  
日めんどくさいし。

記述

病院代は3割負担でいいんだろうか……これで保険にはいってないとか言われたら相当な出費に……。

記述

えっと財布の中には……10円と、1、2、3、4、……。

記述

……。

記述

……14円。

記述

オレ、終わった……。

記述

残念ながらこれ以外にお金はまったく持ち合わせてない。財布二つ持っておけばよかったな。

記述

しょうがないからこの14円で病院に行ってもらおう……。

記述

財布を逆さにして14円を手の上に落とし、そのまま不良風の男に手を差し出した。

涉

「どつぞ」



不良風の男2

「…………あ？ なんだこりゃ？」

涉

「病院代です。これで治療してください」

不良風の男2

「馬鹿野郎！ たった14円じゃ湿布ももらえねえじゃねえかよ！」

不良の男

「てめえ、なめてんのかコラ。あ！？」

記述

骨が折れたはずの右腕を振り上げ、俺を殴ろうと威嚇する。なんだ全然元気じゃないか。

記述

たぶんこの付きまどつてる金魚のフンはそんなに強くないが、アニキって呼ばれてるこいつ、意外と結構強そうだ。

記述

さて、どうしたものか…………。

????

「おんどらあああああああ！！」

不良風の男

「ああ！？」

記述

謎の掛け声とともに突然、ふわっと宙に舞う不良たち。

記述

……な、なんだ!？ 何が起こったんだ!？

不良風の男2

「う、うわあああああああ!？」

不良風の男

「だ、誰だてめ……!？」

不良風の男

「ぎゃあああッ!」

???

「フン……なんだなんだ、男のくせに手ごたえないぞ!！」

記述

一瞬何が起こったのかわからなかった……。

記述

気がつくともレに襲いかかってきてた不良はぶっ飛ばされていて、もう一人の方も空中高く飛び、地面に落っこちていた。

記述

目が覚めるような美人がそこにいた。

記述

背は大きく体つきはしなやかで、鋭く光る眼差し。睨みつけられるとそれだけで震え上がってしまいそうな眼だ。

記述

短めの制服のスカートが風になびいている。

記述

大人びているから多分オレより年上って感じだろう。

記述

地に這いつくばっている不良たちに片足を乗せ、蔑むような目で見下ろす。

記述

え、てかこの人が今こいつらをぶっ飛ばしたの？

謎の女の人

「お前たち……最近こころで古典的になかつあげしてるって噂の不良たちだなっ!？」

謎の女の人

「俺の知り合いに手え出した罪、軽くはないぜ……悪いが、死んでもらっ!」

記述

ズシャア……ッ!!

記述

振り上げた足が唸りをあげる。

記述

不良の学ランを掴み、一瞬のうちに一本背負いをかける。

不良封の男

「う、うわあああああつ!?!」

記述

ドサアツ!!

記述

かなりの高さから振り投げられ地面についた時の音が痛い。

不良風の男

「くっ、ぐ……グウウツ!!」

不良風の男2

「やべーよアニキ、ずらかりやしろう!」

不良風の男

「しょ、しょうがねー」

記述

不良たちは一目散に逃げ出していった。

謎の女の人

「よわっちいやつらー、あ、素人に技かけたっていうのは内緒にし  
といてくれよな?」

渉

「あ、あの」

謎の女の人

「ん」

渉

「助けてくれてありがとうございます」

謎の女の人

「なあに、これぐらい。知り合いなら当然だ。そうだろう？」

記述

いや、初めてお会いしましたけど。

記述

まあこんな美人な人の知り合いだったらどんなにうれしいか。

謎の女の人

「みたところ、どこも怪我してないな……無事で何よりだ」

渉

「ええ。なんともないです」

謎の女の人

「だが、俺の方が大丈夫じゃね……え……」

記述

いきなり倒れこむ謎の女の人。

渉

「え、えええ！？　ちよつ、大丈夫ですか！？」

記述

さっきまで不良を圧倒的にぶっ飛ばしていた様に見えたけど、もし

やどっか怪我とかしたのか……！？

記述

注意して抱きかかえてみる……くそっ、案の定顔色が悪いぞ……っ！

謎の女の人

「……………」

記述

な、何だ……？

謎の菊池先輩

「……………」

季節外れのサンタクロース 第一章004 「薄情なメイドさん」(前書き)

あらずじ。主人公なのにひとりぼっちの渉。そんな渉がクラスメイトの女の子からクラス会に誘われたが、場所を覚えてもらえず、クラス会に行けない渉。連絡先もわからない。放心しながらぶらぶら歩いていると不良に絡まれて踏んだり蹴ったり。そこに謎の女の子が不良をぶつとばした。自分のことを知り合いたというのが完全に初対面。なんかお腹がすいているようだ。笑いあり涙ありの学園青春ストーリー。 第一章004

季節外れのサンタクロース 第一章004 「薄情なメイドさん」

第一章004

記述

ごはん……。

記述

……ごはん？ ああ、メシか。え、お腹すいて倒れたの！？

記述

わ、わけわかんねえ……でもともかく何かはやく食べさせないと……。

記述

だ、だが今の持っている金は14円だけだし……何も食べるもん持っていないぞ。

記述

何を買える……？ うまい棒しか買えないじゃないか……っ！

記述

いや、うまい棒でもこの際……いやいや、ここで俺が取るべき選択は……。

記述

あ、そうだ！ オレがいつも通ってる喫茶店なら顔見知りだし大丈夫だ！



記述

それに人が倒れたっていう緊急事態だし、ツケで何かは食わせてくれるはずだろう。

渉

「よし……そうと決めればッ！」

記述

オレはその助けしてくれた謎の女の人を背中におんぶして、喫茶店へと運んで行った。

記述

……。

記述

……。

謎の女の人

「……あゝ生き返ったあゝ！！ 腹減りすぎてマジ死ぬかと思った  
）……！！」

渉

「いきなり倒れちゃった時はオレも死ぬほどびっくりしましたよ」

謎の女の人

「いやぁ悪いねえ。こんなに御馳走してもらって」

渉

「いえ、不良にからまれてるの助けてもらったし、このぐらいはしない」と

記述

とりあえずメイド喫茶に連れてきたけど……てかどうしよう。どう見ても全然知らない人なんだよなあ。

メイドさん

「ご主人様っ！ 領収書こちらになってま〜す！ 他にご注文はよろしいですかあ〜？」

渉

「あーはい、おっけーです」

記述

……こりゃ破産だな。

記述

にしてもこの人、俺を知り合いの誰かと勘違いしてるのかなあ。

記述

でもこんな美人な人だし、もうちょっと一緒に食事したい気もしいでもない……。

記述

……。

記述

うわあ、めっちゃめっちゃ食ってる……食いすぎだろ、少しは遠慮しろよ高いんだから。

記述

3日間遭難してた人じゃあるまいし……あ、でも空腹で倒れるって相当だよな。

謎の女の人

「……？　なんだ？　人の顔をじろじろ見て……メシ顔についてる？」

渉

「あ、いえ……すつごくお腹すいてたんだなあと思って……そんなに長い間食べてなかったんすか？」

謎の女の人

「あー、今日の昼ごはんを食べそこなっちゃってな」

渉

「あーそうですか。そりゃあ無理もないっすよねえ」

記述

……なんなんだこの人。

謎の女の人

「……んん、俺は1食でもメシ抜くと腹が減って倒れちゃうんだよ。なははは」

渉

「は、はあ……そうっすか」

記述

なんて不便な体質なんだろっ……でも悪い人じゃなさそうだ。

謎の女の人

「普段はちゃんと弁当を作っているんだが、今日はたまたま作ってた弁当が食べられなくなっちゃって」

渉

「えーと、なら食堂があるんじゃない？」

謎の女の人

「そう！ そうなんだよ！ かわりに食堂に行って食べればいいと思っただら、めっちゃくちゃ人がいっぱいぞ！」

謎の女の人

「並んだ挙句に休みが終わって、結局一口も食べられなかったんだ」

謎の女の人

「初めて食堂というものに行ってみたが……食堂と言うのは、あまりにも恐ろしいものなんだなあ……」（遠い目）

記述

どんな食堂だ……まるでうちの学食みたいじゃないか。

謎の女の人

「まあだからずっと放課後まで我慢して、さっさと何か買うモン買おうと思っていた矢先、さっきのでエネルギーを使い果たしてしまっただけ」

謎の女の人

「あの辺りは最近カツアゲ事件が多いらしいから、お前もカツアゲに遭わないように注意した方がいいぞ！」

渉

「はあ……………」

記述

もう遭ったけどね。

謎の女の人

「ところで…………だ、お前は俺と知り合いだったっけ？ どうもお前の名が思い出せないんだけど……………」

記述

きた…………！ やっぱこの人の勘違いだったんだ！

記述

そりゃそうだよ。こんな美人、オレと知り合いのはずがないもん。

渉

「あー、たぶん勘違いされてると思うんですが、オレはあなたとは初めてお会いしたと思いますよ」

謎の女の人

「ふーん、お前は俺の知り合いではない……………そういうことだな？」

記述

え、なんだよ。別にあなたのことは知らないよ。オレには友達居ないんだから。

謎の女の人

「まーうすうすそんな気がしてたっちゃ、してたんだけど」

謎の女の人

「お前のとぼけた顔を見て、どこかで会った事があるような気がしたよーな、しなかつたよーな……と思ってね」

記述

曖昧だなあ……曖昧な上に失礼だ。

謎の女の人

「とりあえず助けておけば問題ねーよな！　と思って助けたんだわ」

記述

アバウトも追加。

謎の女の人

「まあ助けたつもりが逆に助けてもらって飯奢ってもらったわけだ！　ありがとな！」

涉

「いえいえこちらこそどうも」

謎の女の人

「さーで、腹も膨れたし……そろそろ本題に入るとすっか」

涉

「……ほ、本題？」

謎の女の人

「うん、俺にはもーちょいやることが残ってるんだわ」

渉

「はあ……」

謎の女の人

「と言っわけだからお前も来い」

記述

ガシッ！

記述

唐突かつ強引にオレの手を握る。

渉

「は！？ ちょ、ちょっと!？」

謎の女の人

「まあまあいいからいいから」

渉

「いやいやまつたくよくねーよっ！ 今のやりとりの中でもどうい  
うわけでオレが連れて行かれることになったのかさっぱりわかん  
なかつたよ！」

記述

いきなり立ち上がった謎の女は、突っ込みを入れるオレをシカトし  
つつ、手をぐいぐい引っ張って店の外に連れ出す。

謎の女の人

「ありあとざあーしたあーっ!！」

メイドさん

「いってらっしゃいませお嬢様」

涉

「め、メイドさん、オレを助けてええええ〜!!」

メイドさん

「いってらっしゃいませご主人様」

記述

……。

記述

……。



あらずじ。主人公なのにひとりぼっちの渉。そんな渉がクラスメイトの女の子からクラス会に誘われたが、ぼっちすぎて場所と連絡先がわからない。放心しながらぶらぶら歩いていると不良に絡まれて踏んだり蹴ったり。そこに謎の女の子が不良をぶつとばしたかとおもいきや空腹で倒れ、飯を奢らされる。用事があるからお前も来いと無理やり連れて行かれた先はなんと……笑いあり涙ありの学園青春ストーリー。 第一章005

季節外れのサンタクロース 第一章005 「ひとりぼっちを探せ」

第一章005

記述

無理やり連れてこられた先は宴会もできるような広めの料理屋だった。

記述

有無を言わず店内に引つ張られ、店員に案内されるがままに二人で席に着く。

渉

「一体こんなところにまで連れてきてどうするつもりなんすか」

謎の女の子

「いいからいいから、せつかくなんだからちよっと付き合えって！」

渉

「付き合えって……」

謎の女の子

「あ、グラタン一つお願いしまーす」

記述

まだ食うのかよ。

記述

渋々席に座ると謎の女の子は、他人に聞かれないように小声でオレ

に耳打ちする形で喋った。

謎の女の子

「いいか、俺は今……有る条件に当てはまる人間を探してんだ」

渉

「はあ……探せばいいじゃないすか」

謎の女の子

「お前も手伝え」

渉

「え、何でオレが」

謎の女の子

「あれを見る」

記述

また無視かよ……。

記述

なんだよ、あれを見ろったって……。

記述

あ……。

謎の女の子

「ちようどいいところにクラス会っばいのがいるだろ」

謎の女の子

「いいか、あの中で”ひとりぼっち”を見つけて欲しい」

渉

「……は？」

謎の女の子

「ひとりぼっちになってる奴だ。みんなと仲良くできない、一番友達がいなさそうな奴。俺はそいつを確かめに来たんだ」

謎の女の子

「俺は別のところからそいつを探す。友達がいなさそうな奴がいたら俺に教えに来い」

記述

何だ……？ 何を言っているんだこの人は。

記述

何かわけのわからんことになってきたぞ……。

記述

オレはわけわからん美人に助けられ、飯を奢らされ、飯屋でひとりぼっちを探している。

記述

目線の先にはワイワイと楽しそうな学生たちの塊。

記述

……何の目的でこんなことしてるのか……まったく想像できない。

記述

どこの飯屋で宴会やってる生徒たちの群集……その中から”ひとりぼっち”を探し出すなんて……。

記述

あれとか言うから見てみたらなんだよ、あれ確実にオレのクラスの連中じゃねーか。

記述

オレのクラスで一番友達がない奴……。

記述

それってオレのことだろ、どう考えても。

記述

ならさっきのあの人はオレに用があるってことなのか？　そういえば何か確認しにきたって言うていたが……。

記述

オレがひとりぼっちだっていうことを確認する事以外に何かあるんだ。わざわざオレが実際にひとりぼっちになっているところを見物しにきたのか？

記述

でもさっきの人はオレのことを知らない……だから今探しているんだ、ひとりぼっちのオレを。

記述

……。

記述

何れにしる、自分が行けなかったクラス会を影からこっそり見させられるなんてこれ以上ない罰ゲームだ。

記述

……さっきの人がオレに何の用があるのかは知らんがオレはあの人に用は無い。

記述

とりあえず一刻も早くこの場所から離れないと……クラスの奴らに見つかったら面倒だ。

記述

ふいー、やっと落ち着いたな……。

記述

ばれないように店の外に出て冷たい夜風を顔で受ける。効きすぎた室内の暖房の火照りを冷ます。

記述

あーあ、オレ何でこんなことしてんだろう……。

記述

クラス会には置いていかれ……下校途中に不良に絡まれ……変な女にメシおごって……。

記述

あれ、最後はいいんじゃない？

記述

まあいいか……さーて、今日はぐつと疲れた……家に帰ってゲームでもやって疲れを癒しますかねえ……。

記述

陽気に鼻歌を口ずさみつつ、家路につくために店の入り口を出る。

幹事の子

「……………」

記述

……。

記述

……………。

記述

うのおおおオオオッツほおおおおああああああつっ  
！！！！？？？

記述

や、やっべええええ……っっ！！ 超びっくりしすぎて大声上げち  
まうところだったっ！！

記述

オレを誘ってくれた幹事の子じゃないかっ！！ 今一番会っちやい  
けない人物にいきなり鉢合わせかよ……ッ！？

幹事の子

「……………」

記述

……？ し、しめたっ！ まだオレに気づいてない！

記述

一般人のふりして前を過ぎ去り物陰に隠れよう……！

記述

スタスタ……。

幹事の子

「……………」

記述

スタスタスタ……。

幹事の子

「……………」

記述

スタスタスタスタ……。

記述

よ、よし……うまくバレずにすむか……っ！？

幹事の子

「……………！ あ……………！」

渉

「ぐうっ！？」



幹事の子

「…………イクシッ!」

記述

……………く、くしゃみかよ……………驚かせやがって……………。

記述

とりあえずバレなかったみたいだな……………振り返られないうちに早く物陰に……………っ!

記述

ふう……………どうにかなったな。

記述

幹事の子、なんであんなところにいるんだよ……………ふう、まだ心臓がドキドキしてやがる……………。

記述

あれ、でもまだクラス会は終わってなかったよな……………もしかして抜け出しているとか?

記述

じゃないとこんなところでひとりでなんて……………。

記述

……………あれ、ひとり? ……ひとりと言えば……………。

(回想)

謎の女の子

「いいか、あの中で”ひとりぼっち”を見つけて欲しい」

渉

「……………は？」

謎の女の子

「ひとりぼっちになってる奴だ。みんなと仲良くできない、一番友達がいなさそうな奴。俺はそいつを確かめに来たんだ」

記述

あの謎の女の子……………ひとりぼっちのやつを探していたんだよね……………？

記述

もしかしてあの人が探してた人物って、幹事の子じゃ……………。

????

「おーい」

クラスの男

「はあはあ……………待ったか？」

幹事の子

「もー、おそいよー」

渉

「……………」

クラスの男

「抜け出すのに手間取ってさ……」

幹事の子

「ウソばーっか。……しっかり見てたんだから。修ちゃんたら、女の子に話しかけられただけでデレデレ鼻の下伸ばしちゃってさ」

クラスの男

「……女の魅力にはな……逆らえないんだよ……」

幹事の子

「わたしだって女の魅力あるよっ」

クラスの男

「お前に女の魅力う？ 残念ながらないな……」

幹事の子

「な、なにおっ！」

渉

「……」

謎の女の人

「……失恋ってやつ？」

渉

「う、うわあああっ！？ で、でたあああああああっ！？」

謎の女の人

「しっ、大声出すなよ！ ここにいるって気付かれるだろが」

渉

「いや、その……なんでそんなところにいるんすか」

謎の女の子

「お前が店出ていくのが見えたから」

渉

「だからってなんでゴミ箱の中に……」

謎の女の子

「しっ」

渉

「むが……っ!？」

記述

さっと手でオレの口を塞ぎ、抱き寄せられる。

幹事の子

「……?」

クラスの男

「どうした?」

幹事の子

「いや、今なんか声が出たような……きのせいか」

季節外れのサンタクロース 第一章006 「鬼だ、鬼がいる」(前書き)

あらずじ。主人公なのにひとりぼっちの渉。そんな渉がクラスメイトの女の子からクラス会に誘われたが、ぼっちすぎて場所と連絡先がわからない。不良に絡まれていた所を謎の女の子に助けられ、飯を奢らされる。用事があるからお前も来いと無理やり連れて行かれた飯屋では、なんと自分のクラスが開かれていた。謎の女の子はひとりぼっちを探しているという。それ完全にオレじゃん。やってらんねえと店から逃げ出した矢先に、クラス会に誘ってくれた女の子と鉢合わせした。笑いあり涙ありの学園青春ストーリー。 第一章006

季節外れのサンタクロース 第一章006 「鬼だ、鬼がいる」

第一章006

幹事の子

「明日から修ちゃんのお父さんとお母さん……旅行に行くんだよね」

クラスの男

「ああ」

幹事の子

「それじゃあ、私が毎日修ちゃんを起しに行つてあげなきゃ！」

クラスの男

「はあ？ 却下」

幹事の子

「なっ、どうしてさー!!」

クラスの男

「せつかく親がいなくて自由を満喫できるんだ。お前ごときに邪魔されてたまるか！」

幹事の子

「じゃあ明日行くから」

クラスの男

「あのー菜穂さん？ 人の話聞いてた？」

幹事の子

「修ちゃんのお母さんから毎朝修ちゃんを起こしてあげてねって頼まれてるからね」

幹事の子

「修ちゃんのお弁当も、ちゃんと作ってきてあげるから」

クラスの男

「……へいへい」

幹事の子

「えへへ……」

謎の女の人

「仲良さそうだな」

渉

「……実際仲がいいんじゃないのでございましょうか」

記述

……初恋の相手が彼氏持ち……。

記述

どんなことしたって結局はこんな結末がオレにはお似合いなんだよな……。

記述

なんかもうどうでもいいや……。

渉  
「オレ、家に帰りますわ」

記述

……。

記述

……。

謎の女の子

「待てよ」

渉

「……？」

謎の女の子

「お前、あの子と知り合いなんだろ……？」

渉

「ただの、クラスメイトですよ」

謎の女の子

「ふうん……」

渉

「……」

謎の女の子

「……いいのか？ そんなこと言っ。あの子はお前の好きな子じ



やないのか」

涉

「……なんでそんなことまで知ってるんですか」

謎の女の子

「あの子のところにあの男が来たときのお前の動揺っぷりは……ちよっと面白かったからな」

記述

くそつ……めちやくちや馬鹿にされてる。

記述

そりや動揺だつてするだろ、好きな子が彼氏持ちなんて……しかも相手は小さい頃からの幼馴染って感じだし、対する俺はただのぼっち……オレの入る隙なんてないじゃないか……。

謎の女の子

「まあ、諦めるしかないだろうな」

涉

「……」

涉

「オレ……友達いなかったから、今日の今日までクラス会があるってこと知らなくて……午後の授業の休憩時間るとき、あそこにいる子に教えてもらったんすよ……」

涉

「誘われたのがすっげえうれしくて、それで一目惚れして……」

渉  
「クラス会行けばもしかしたら友達とかになれるかもって期待して早く授業が終わるようにってワクワクしながら寝たんですよ」

渉  
「……そしたら、誰もオレに声かけてくれないでやんの。起きたら教室に誰もいないんですよ」

渉  
「後はまあ……商店街でぶらぶらしてたところにあんたが来て、偶然かどうか知らないけどオレのこのクラス会にあんたに連れてこられて……」

渉  
「クラスのやつに見つかるのが怖くて……耐え切れなくなって逃げ出してきたんですよ」

渉  
「……あんたがひとりぼっちのやつ探してんなら、とんでもない逸材が目の前にいますよ」

渉  
「きつとオレは、ずっとひとりぼっちの運命なんだ。ハハ……あんに目を付けられたのは、クラス会なんかに期待したバチがあたって感じですかね」

渉  
「幹事の子のこともすっぱり諦めて、今回のことを反省し、オレはオレらしく鉢の下ナメクジのように、ジメジメと生きていきますよ」

謎の女の子

「……長々とした一人語りはやっと終わりか？ もう少しで寝るところだったわ」

謎の女の子

「ぱっとしねえやつ……暗すぎてカビが生えそうだ……ほんとに夕マツいてんのか」

渉

「ついてますよ、無駄に二つも。でもオレはこつこつ奴なんで」

謎の女の子

「こつこつ奴って好きな女の子に見つからないようにこそこそ隠れて逃げようとしてる根暗な奴のこと？」

渉

「あのですねえ……」

謎の女の子

「……よっこいしょっと」

記述

オレが何か言う前に、女の人は静かに立ち上がった。

謎の女の子

「……お前がどれだけひとりぼっちの惨め野郎かはよく分かった」

謎の女の子

「なあ……お前に、ひとつだけいいこと教えてやるよ」

記述

……？

謎の女の子

「いいか、人間なあ……必死になって歯あ食いしばりゃ、大抵のこととはどうにかなるもんだ」

謎の女の子

「今回のお前の場合も決して例外じゃねえ……」

謎の女の子

「おわかり？」

渉

「は、はあ……」

謎の女の子

「運命だバチだ言う暇があったら、必死になって足掻けるだけ足掻いてみるっ……！」

謎の女の子

「……うりゃあっ……！」

記述

ドカッ！ ドカッ！（蹴り上げられる音）

渉

「痛っ！ ちょ、ちょっ、なんでいきなり蹴るんすかっ！？ だっ

……ちよっとやめ……っ！？」



謎の女の子

「歯あ食いしばれっ!!」

記述

ドカアアアンッ!!

渉

「ぐはあっ!!!?!」

記述

ドカツ! ゴロゴロゴロ、バタッ……!!

幹事の子

「……えっ?」

クラスの男

「……な、なんだっ!? 今の音……」

渉

「いつっ……」

記述

盛大に蹴りくれやがって……歩道に蹴り出されちまった……っ  
は、早く隠れないと見つかる……!!

謎の女の子

「菜あ穂さああああんっ!!」

渉

「ちよっ!!?」

幹事の子

「今なんか物陰から大声で私の名前が……」

記述

鬼だ……鬼がいる……っ!

記述

やばい……っ!! 万事休すだ……っ!! もうさっさとこの場から逃げ……!!

幹事の子

「熊谷……くん……?」

記述

……っ!!

あらずじ。主人公なのにひとりぼっちの渉。クラス会に誘ってくれた幹事の子にひとめぼれ。だがぼっちすぎてクラス会の場所と連絡先がわからない。不良に絡まれていた所を謎の女の子に助けられ、飯を奢らされる。自分のクラス会が開かれているところに連れていかれ、ひとりぼっちを探せといわれた。それ完全にオレじゃん。逃げ出した矢先に、クラス会に誘ってくれた女の子と鉢合わせ。ぎりぎり見つかっておらず物陰に隠れて様子見。彼氏登場。情けない様子の渉に、正面から告白してこいと蹴り出される。とうとう幹事の子にみつかってしまった。笑いあり涙ありの学園青春ストーリー！。



季節外れのサンタクロース 第一章007 「もしかして彼氏？」

第一章007

幹事の子

「熊谷君……だよな？」

渉

「えっと……」

幹事の子

「ど、どうして……」

記述

まずいな、とうとう見つかった……っ！！

記述

あーもうどうなってんだよーっ！ それもこれもみんなあの訳わかんない女の人のせいだ……！

記述

あいつにさえ会ってなければこんなことにはならなかったのに……くそっ……あー心臓バクバクいつてきた……。

記述

本気で告白すんのかよ……冗談だろ……オレ、一体どうすれば……。

幹事の子

「あの……」

渉

「えっと……その……」

幹事の子

「……」

幹事の子

「じめんなさい……っ！..!」

渉

「……え？」

幹事の子

「私……熊谷くんに会場の場所知らせてなかったの忘れてて……気づいて学校に戻ったときも熊谷君、もう帰っちゃってたから……」

渉

「い、いや……その……」

幹事の子

「……え？」

渉

「お、お、お……オレが……その……寝てたオレが悪いし……」

渉

「連絡つかないのも元はといえば……オレに……友達が居ないせいだったり……」

幹事の子

「その……「うん……「うめん……ね？」

渉

「うん、うん……」

記述

どもりまくり……かつこ悪……。

記述

ってかなんだ、あの後教室に来てくれたのか……幹事の子……え  
ーっと、菜穂さんか。

記述

菜穂さんってやつばええ子や……。

渉

「あの……な、なんでこんなところに……？ クラス会、まだ終わ  
ってないんでしょ？」

幹事の子

「ああ、それはその……」

幹事の子

「あ……」

クラスの男

「ちーっす。えっと、熊谷……だっけ……？」

渉

「こんばんわ……」

クラスの男

「菜穂の友達？」

幹事の子

「あ、うん。今日ちょっと教室で話したの」

クラスの男

「へえ」

幹事の子

「あ……えっと……しよ、紹介するねっ！ こっちは私の幼馴染で、今年からクラスが一緒になった黒崎修二くん」

黒崎

「うす」

渉

「……もしかして……か、彼氏？」

幹事の子

「か、か、か……彼氏って……っ！ 修ちゃんとはそそそそそそそなんじゃないよー！」

黒崎

「ほづ……そうだったのか」

幹事の子

「……もー……修ちゃんっ！？」

黒崎

「へいへい」

幹事の子

「……で、今日初めて知り合いになった熊谷くん」

渉

「どうも」

黒崎

「どうも、なんか菜穂が迷惑かけたみたいだな。ほれ、ちゃんと謝  
っとけよ?」

幹事の子

「うん、ごめんね……熊谷くん、私のせいでクラス会来れなくなっ  
ちゃって……本当にごめんなさい」

渉

「いやいやいや……そんなことないよ」

幹事の子

「で、でも……よくここが分かったね、あ、もしかしてクラスの  
他の友達から連絡きたのかな?」

渉

「いや、オレ友達いないし……ここがわかったのはたまたまっ  
てい  
うか……俺にも何がなんだかよくわかんなくて……」

幹事の子

「そ、そう……なんだ……」

渉  
「うん……」

幹事の子  
「……」

渉  
「……」

記述  
会話続かねえ……空気が重い……。

記述  
……ドカツ!!

記述  
あ、背後から何かゴミ箱蹴っ飛ばしたような音が聞こえる……聞こえないふりしよう。

渉  
「き、奇遇だね。こんなところで会うなんて」

幹事の子  
「そ、そうだね」

渉  
「え、えつとお……お、オレは、たまたまここにいただけだから」

渉  
「菜穂さん見つけたから、今日のこと言っとかないと思って思った」

ていうか……なんていうか……」

渉

「今日の事は、ほんともー気にしないで。だいじょーぶだから。ノ  
ープロブレムです、むしろ気を遣ってくれてありがとございまし  
た」

幹事の子

「……？ は、はい……」

渉

「えっと……あとは……」

幹事の子

「……？ あとは……？」

渉

「あとは……」

幹事の子

「……？」

渉

「……」

渉

「そ、それだけ……」

幹事の子

「……う、うん」

記述

うつうつ……言えるわけないだろ……。

黒崎

「……………」

黒崎

「あれ？　もしかして熊谷って……………」

渉

「へ？」

黒崎

「……………」

黒崎

「いや、なんでもないわ」

黒崎

「終わった？」

幹事の子

「あ、うん」

黒崎

「そっか、じゃー俺たちフケるから。いやー中、騒がしすぎて落ち着かなくてさ」

黒崎



「あ、もしよかったら今からでも参加していけば？ クラス会」

涉

「いや、さすがにそれは……」

黒崎

「そうか、残念だな……じゃ、俺たちはコンビニで肉まんでも買って二人で食うか、菜穂」

幹事の子

「に、肉まん……！？ 肉まんって聞いて急に菜穂さんのお腹が減ってきたよ〜！」

黒崎

「ははは、お前はいつつも腹空かしてんなあ〜」

幹事の子

「につくまん、につくまんっ」

黒崎

「わかっていると思うけどお前の奢りだぞ」

幹事の子

「えええええええ！？ それは初耳だよー！？ 全然わかってないよー！」

幹事の子

「修ちゃん……」じついつとき男の子が女の子に奢るものだよ？」

黒崎

「ふははは、菜穂ごときに100円も出せるわけないだろう。奢るならもつともつとかわいい女子にするわ」

幹事の子

「な、なにおーっ!」

黒崎

「それじゃあ熊谷、また学校で!」

渉

「……あ、うん」

幹事の子

「熊谷くん、今日はごめんね! それじゃまた学校で!」

渉

「……はい、また明日……」

幹事の子

「ばいばい」

渉

「ばいばい」

謎の女の子

「菜穂さああああああああんっ!……!」

幹事の子

「ふ、ふえええっ!?!」

謎の女の子

「私、熊谷はあああつ！ 菜穂さんに、大事な話がありまああ  
ああすつっ！！」

記述

……いやっほーい。やっぱ許してくれるわけねーよなあ……。

黒崎

「……えつと？ なんか物陰で叫んでる人がいるけど……知ってる  
人？」

渉

「名前も知らないです……」

黒崎

「……？」

幹事の子

「えつ、えつ！？ わ、私!？」

渉

「なんでもないなんでもない、さあ早く黒崎君と一緒に肉まん食べ  
に行っ……」

謎の女の子

「菜穂さあああああああああんっ！……!！」

渉

「Oh……」

記述

だめだ……。こりゃ言うまで叫び続けるぞあの人……。

幹事の子

「えっと……熊谷……くん？」

渉

「……はい」

幹事の子

「……大事な話……？ あるの……？」

渉

「……」

渉

「……うん」

季節外れのサンタクロース 第一章008 「渡しはしないけど」(前書き)

あらずじ。主人公なのにひとりぼっちの涉。クラス会に誘ってくれた幹事の子にひとめぼれ。だがぼっちすぎてクラス会の場所と連絡先がわからない。不良に絡まれていた所を謎の女の子に助けられ、飯を奢らされる。自分のクラス会が開かれているところに連れていかれ、ひとりぼっちを探せといわれた。逃げ出した矢先に、幹事の子と鉢合わせ。正面から告白してこいと物陰から蹴り出される。なんとかごまかそうとしてみるが、もう言うしかない状況に。笑いあり涙ありの学園青春ストーリー。 第一章008

季節外れのサンタクロース 第一章008 「渡しはしないけど」

第一章008

幹事の子

「何かな？」

渉

「えっと……その……」

幹事の子

「……？」

渉

「……二人きりで話してもいいかな」

幹事の子

「え……うん、いいけど」

幹事の子

「修ちゃん、熊谷くんが私に何か用事あるみたいだから、ちょっと待っててね」

黒崎

「お、おう……」

幹事の子

「肉まん、買ったってねっ」

黒崎

「お前の分も食っといてやるよ」

幹事の子

「あー!!」

黒崎

「はよ行けアホ」

幹事の子

「……ぶー」

黒崎

「……」

黒崎

「熊谷……」

黒崎

「……」

黒崎

「……ちょっとぐらい貸してやるか。渡しはしないけど」

黒崎

「相手はあの菜穂だし、たぶん大丈夫だ」

黒崎

「ま、頑張ってる」

記述

……。

記述

……。

幹事の子

「……」

渉

「……」

記述

……何となく連れ出しちゃったけど……どこ行くっ。

記述

どっか落ち着ける場所……あ、そういえば近くに公園があったな……。

渉

「えっと、ここで」

幹事の子

「この公園？」

渉

「ひん」



記述

うん、中に誰もいない……。

幹事の子

「よ、夜の公園って……なんか緊張するね」

渉

「す、すみません」

幹事の子

「あ、やつ、そういう意味じゃなくてっ！」

渉

「……………」

幹事の子

「……………」

記述

……………。

記述

静かになった。

渉

「……………」

渉

「じ、じいじでいいかな」

幹事の子

「…………はい」

記述

…………やっばい、緊張する。

記述

心臓バクバク言い過ぎて、なんか呼吸が苦しい…………。

記述

そういえば…………オレ、告白するのって初めてか…………。

記述

これが告白か…………。

幹事の子

「…………大事な、話って？」

記述

来た。

涉

「…………そ、その」

記述

…………落ち着け…………落ち着けよ…………。

涉

「…………オレ、今日…………あんたにクラス会誘われたとき、めっちゃ嬉しかった」

幹事の子

「……………」

渉

「実は、恥ずかしい話……オレずっとクラス会とかそういうの他人から誘われたことなく……ずっと一人だったんだ」

幹事の子

「……………うん」

渉

「いつつもつまねえ毎日だって思ってずっと過ごしてきたけど、もしかしたら何か変わるかもって思って、すっごくワクワクしてたんだ」

渉

「結局はいけなかったけど」

幹事の子

「い、ごめん……………」

渉

「あ、いや…………っ！ オレはそういうことが言いたい人と違って……………」

渉

「あああ…………オレっては何言ってたっ、アホか…………っ」

渉

「い、ごめん……オレ、こつこつって初めてで……すごくテンパ  
ってるんだ」

幹事の子

「うっん、ちゃんと聞いている。大丈夫だよ」

幹事の子

「頑張つて……っ！」

渉

「うん……」

渉

「オレ、気づいたら……」

渉

「菜穂さんのこと、好きになってた……」

幹事の子

「……」

幹事の子

「……はい」

渉

「今日会ったばかりの人に、何言つてんだって思われるかもしれ  
ないけど……これがオレの気持ちです」

渉

「よ、よかったら……っ！」

渉

「オレと付き合ってください……っ……！」

記述

……。

記述

……。

記述

言い切った……っ！

記述

言い切ってやった……っ！！

記述

ああ……顔が熱いのが止まんねえ……っ！！ めっっちゃ緊張する  
……っ！！

幹事の子

「……熊谷くん」

渉

「はい」

幹事の子

「……」

幹事の子

「……………ありがとう、熊谷くんが好きだって言ってもらえるなんて、私とっても嬉しいよっ」

涉

「……………はい」

幹事の子

「熊谷くん、すごく勇気がある人なんだね……………尊敬します」

涉

「……………えっ?」

幹事の子

「今日、私と初めて会ったのに、好きだって伝えられるなんて……………すごいことだと思う。ちょっと熊谷くんが羨ましいよ……………」

幹事の子

「私は、好きな男の子がいても……………ずっと気持ちを伝える勇気がでなくて、何年も何年もそのままもん」

幹事の子

「だから、熊谷くんが気持ちを伝えてくれたのは、すごく嬉しいよ!ほんと私なんかでいいのっ!? って、なんだか申し訳なくなっちゃっよ」

涉

「菜穂さん……………」

幹事の子

「……………ただど……………熊谷くんの気持ちには、答えられない……………」

幹事の子

「ごめんなさい」

渉

「……………」

幹事の子

「私には、好きな人がいるから……………」ごめんね

渉

「いや……………いいんだ……………こっちこそいきなりこんな事言っでごめん……………」

幹事の子

「いやいや……………そんなことないよ」

渉

「……………」

幹事の子

「……………」

渉

「……………」

幹事の子

「あ、でもでも……………っ！ まだ私熊谷くん的事よく知らないし……………っ！ 話してみた感じ、熊谷くんのこと嫌いじゃないよっ！」

幹事の子

「だ、だから……友達としてこれから仲良くしてくれると、うれし  
いなっ」

渉

「……はい」

幹事の子

「……く、熊谷くん……？」

渉

「ぐすっ……ぐすっ……うっ……」

幹事の子

「えっ、ええっ!? ちょ、熊谷くんっ、泣いてるのっ!？」

渉

「いや……泣いてない、泣いてないから……ぐすっ……」

幹事の子

「な、泣いてるよっ! ごめんね、ごめんね……っ! 私が断った  
から……い、今ハンカチで……っ」

渉

「大丈夫……大丈夫だから……っ、うっ……うああああ……」

記述

……。

記述



記述

あらずじ。主人公なのにひとりぼっちの渉。クラス会に誘ってくれた幹事の子にひとめぼれ。だがぼっちすぎてクラス会の場所と連絡先がわからない。不良に絡まれていた所を謎の女の子に助けられ、飯を奢らされる。自分のクラス会が開かれているところに連れていかれ、ひとりぼっちを探せといわれた。逃げ出した矢先に、幹事の子と鉢合わせ。正面から告白してこいと物陰から蹴り出される。公園で二人きりになって告白したが、振られて男泣きする渉。笑いあり涙ありの学園青春ストーリー。第一章009

季節外れのサンタクロース 第一章009 「責任は取ってやる」

第一章009

渉

「ずー……」

幹事の子

「落ちついた……？ 熊谷くん……」

渉

「うん、ごめんな……かつこ悪くて」

幹事の子

「そんなことないよ」

渉

「ずー……」

渉

「……落ち着いた」

渉

「悪い、迷惑かけちゃって……」

幹事の子

「ううん、いいよいいよ。」

渉

「もう大丈夫だから……」

幹事の子

「うん、わかった」

記述

ハンカチ……ずぶ濡れじゃないか……よく泣いたなあ……。

渉

「ハンカチ、洗って返すよ」

幹事の子

「いいよいいよ、気にしないで」

渉

「いや、そんなわけには……」

幹事の子

「いいからいいから」

渉

「……ありがとう」

幹事の子

「どういたしましてっ」

記述

……やっぱり、ええ子や……。

記述

あーあ、振られちゃった……。

記述

でも……なんだろう、なんか心地いいや。

渉

「ねえ、菜穂さん」

幹事の子

「はい」

渉

「菜穂さんの好きな人ってもしかして……」

幹事の子

「うん……」

幹事の子

「熊谷くん、勇気だして言ってくれたんだもん。熊谷くんには教えてあげる」

幹事の子

「私の好きな人は……修ちゃんだよ」

幹事の子

「子供のころからずっと好きなんだけど、ずっと言えないままでいるんだ……」

渉

「いつか……言えるといいね」

幹事の子

「うん、ありがとう」

幹事の子

「そろそろ私行かなきゃ。修ちゃんに私の肉まん食べられちゃう」

渉

「そりゃ大変だ」

記述

立ち上がって幹事の子を見送る。ついでにズボンについた土の汚れを払い落とす。

記述

地面が湿ってて、ちょっと染みになったかも……。

幹事の子

「……熊谷くん！」

渉

「……なにー？」

幹事の子

「さっきの事、私と熊谷くんだけの秘密だからー！」

幹事の子

「絶対誰にも喋っちゃだめだよー！」

渉

「……わーかったーよー！」

幹事の子

「それじゃ、また明日学校でー！ ばいばいー！……」

渉

「ばいばいー！……」

渉

「……」

渉

「……はあ、振られちゃった」

記述

……まあ無理だっけ分かってたけどね。

……？

「……やればできるじゃんか」

謎の女の子

「かつこよかったぞ。お前」

渉

「やっぱり見てたんすか」

謎の女の子

「……どうよ、気分は」

記述

そう言われて、ちょっと夜空を見上げてみる。

記述

星がきれいだな……。

渉

「……………」

渉

「悪くは、ないっす」

記述

結果はうまくいかなかったけど、言って良かったかも……。

謎の女の子

「……………そうか、よかったな」

渉

「でも、どうしてくれるんすか。やることが無茶苦茶っていつか……あんたのせいで初恋の人に振られちゃいましたよ」

謎の女の子

「なんだ、初恋だったのか。初恋がこんなんじゃ散々だな、ハツハツハツハ」

渉

「笑い事がよ……………」

謎の女の子

「まあ、安心しろ。ちゃんと責任取ってやるよ」



渉

「……………はい？」

謎の女の子

「こうなったのもまあ俺のせいだ。ちゃんとして責任取ってやるってんだよ」

渉

「オレ、冗談で言ったんですけど」

謎の女の子

「まあ、任せておけ。まあ、何もなくてもどうせ同じことだったろうからな」

渉

「……………？ 何言ってるんすか」

謎の女の子

「詳しいことは明日学校で話してやる……………さーて、これで俺の用事は済んだ、俺も帰るかな」

渉

「用事……………？ そうだ、あんたオレに用事があったんだろ？ なんか確認したいことって……………」

謎の女の子

「もう済んだ」

渉

「……………」

謎の女の子

「俺の確認したかったことは、お前がひとりぼっちかどうか、その現状を変えたいかどうか……」

謎の女の子

「そしてその現状を本当に変える決断をすることが出来るかどうかだ」

渉

「あなた……」

謎の女の子

「そうだな、もうひとつ用事が出来た」

謎の女の子

「これから付き合い長くなるんだろうし俺の名前はちゃんと呼んでもらわねえとな」

謎の女の子

「俺の名前は、『菊池 麗』だ」

渉

「菊池……麗……」

麗

「ああ、一応お前の一個上だからちゃんと先輩をつける」

渉

「は、はあ……」

麗

「明日、学校でまたお前を呼びだす……その時に最終確認をする」

涉

「最終……確認？ 何すかそれ」

麗

「お前……送ってみたいくない……？」

涉

「その……何がです？」

麗

「ゲームの主人公”……みたいな青春」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5319z/>

---

季節外れのサンタクロース

2011年12月17日23時57分発行